

機関番号：23301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：平成 20 年度～平成 22 年度

課題番号：20520087

研究課題名（和文） 17 世紀腐蝕銅版画技法の総合的研究

研究課題名（英文） Studies on Etching Technique in the 17th Century

研究代表者 保井亜弓（YASUI AYUMI）

金沢美術工芸大学・美術工芸学部・教授

研究者番号：30275086

研究成果の概要（和文）：1645 年に初めての本格的な凹版画の技法書を発表したアブラム・ボスは、ジャック・カロの革新的な技法の後継者と看做されている。版画技法は刷られた作品から検討されるのが常であるが、本研究では、デジタル・マイクロスコブによる原版調査と技法書に書かれた防蝕被膜（グランド）の再現実験により、できる限りもの自体に即したアプローチを行い、版画技法の新たな側面に光を当てることを試みた。その結果、ボスおよびカロの制作の工程や技法をより明らかに示すことができた。

研究成果の概要（英文）：Abraham Bosse's treatise, published in 1645, is the first comprehensive manual book of intaglio print. It has been said that Bosse inherited Jacques Callot's innovative etching technique. While the graphic technique is commonly investigated by the impressions, our study that focuses on material itself is a new approach to it. We observed the original copperplates by a digital microscope and reconstructed the ground after the recipes in the treatise. The result shows more clearly the process of the execution by Bosse and Callot.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
20 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
21 年度	700,000	210,000	910,000
22 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：Abraham Bosse、Jacques Callot、エッチング、技法、版画、17 世紀

1. 研究開始当初の背景

（1）1645 年に刊行されたアブラム・ボス（1602/4-1676）の『腐蝕銅版画技法』は、初めての本格的な凹版画技法書であり、ヨーロッパ各国語に翻訳され 19 世紀まで多大な影響を与えた、版画史上きわめて重要な書である。研究代表者および分担者は、所属研究機関の平成 12 年度から平成 15 年度にわたる

「銅版画技法の研究」に参加し、その成果としてボスの技法書初版を翻訳し、2004 年 3 月に『17 世紀フランス銅版画技法の研究 アブラム・ボス『酸と硬軟のワニスによる銅凹版画技法』』（以下ボスの技法書を『腐蝕銅版画技法』と記す）を上梓した。腐蝕法すなわちエッチングの方法自体は、現代まで基本的にはほとんど変わらないと言われるもの

の、文献のみからでは当時の技法の実態を理解することは困難である。この研究に際して、ボスの言及する処方や手法のより詳細な検討が必要であると痛感した。

(2) 翻訳書刊行直後にパリとトゥールで開催された大規模な「アブラム・ボス」展を見学した際、ルーヴル美術館カルコグラフィーにおいて、原版をマイクロスコプで観察する機会があり、版の刻線の形状を知るとは技法の理解に有効な手段であると判断した。素材を対象とした保存修復という観点からの研究は、版画の場合は主に紙に集中しており、原版の研究はほとんど行われていない。

2. 研究の目的

(1) 本研究では、版画技法を探求する際に出来る限り素材自体に迫り検討することを試みた。ボスの技法を検証する方法として、原版の観察を選んだのは、ルーヴル美術館カルコグラフィー室長フランソワ・ボドカン氏による「技法をもっとも確実に知るにはその原版を見ることだ」という見解による。一般に版画は刷られた作品からその技法を検討するが、原版が現存している場合は、そこからも多くの知見を得ることが期待できる。

(2) 同様に素材に迫るという観点から、第3版であるコシャン版『腐蝕銅版画技法』(1745)に記された防蝕被膜であるグラントの処方に従って再現実験を行い、当時考えられていた17世紀のグラントがどのようなものであったかを検討する。

(3) 以上の研究から、『腐蝕銅版画技法』の記述との比較を行い、制作の工程や技法の判定をより明らかにする。

3. 研究の方法

(1) ポータブルのデジタル・マイクロスコプを用いて海外および国内の原版調査を行う。調査機関は、ボスおよびジャック・カロ(1592/3-1635)、さらに同時代の原版を所蔵するパリのルーヴル美術館カルコグラフィー、ナンシーのロレーヌ州博物館、トゥールの美術館、ブリュッセルの王立図書館カルコグラフィーを主とする。

(2) 古版画の原版の状態を熟知している専門家であり、自ら刷り師でもあるルーヴル美術館カルコグラフィー室長ボドカン氏との意見交換を行う。

(3) 調査結果とボスの『腐蝕銅版画技法』の記述とを照合する。

(4) ボスの『腐蝕銅版画技法』の第3版で

あるコシャン版(1745)に記された処方に従いグラントを再現する実験を行う。その際、できる限り記述に忠実な原材料を海外でも収集する。

(5) 各調査機関において、原版の保存状況などをあわせて調査する。

4. 研究成果

(1) 海外および国内での原版調査については、3年間の研究期間内に以下の機関で調査を行った。

①第1回海外調査 2008. 9-10

- ・パリ、ルーヴル美術館カルコグラフィー
- ・ナンシー、ロレーヌ州博物館

②第1回国内調査 2009. 2

- ・長崎、ハウステンボス美術館・博物館

③第2回海外調査 2009. 9-10

- ・ロンドン、ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館
- ・トゥール、美術館
- ・パリ、ルーヴル美術館カルコグラフィー
- ・ナンシー、ロレーヌ州博物館
- ・ブリュッセル、王立図書館カルコグラフィー

④第3回海外調査 2010. 9

- ・ベルリン、国立美術館版画素描館
- ・ブリュッセル、王立図書館カルコグラフィー

ルーヴル美術館カルコグラフィーの歴史は、ルイ14世の治下1660年に開設された「王の版画原版収集室(Le Cabinet des Planches gravées du Roy)」に遡り、1797年に国立カルコグラフィー(Chalcographie Nationale)が設立された。14000点以上の原版を保有するこのカルコグラフィーでは、現在でもなお収集が続けられている。ルーヴル美術館には、その売り場は縮小されたとはいえ、カルコグラフィーのブティックがあり、オリジナルの原版から刷られた版画が販売されている。このように、カルコグラフィーはたんに原版を保存収蔵しているだけでなく、日々原版から版画を刷っているのであり、まさに活動している機関である。カルコグラフィーでの調査の利点は、原版が観察に最も適した状態にあるということである。つまり、原版にインクが詰められていない状態なのである。原版にインク詰めしておくことは、美術館などでは多く行われている。なぜなら、インクを詰めないと画像がよく見えないのからである。レンブラントの原版がそうであるように、観賞するためには、そうした処理が行われることが多く、さらに保護のために光沢のあるニスがかけられている場合もある。技法を正確に見分けるには、刻線の奥の形状を見る必要がある。上記のような状態は観察に適しているとは言い難い。ルーヴル美術館カルコグラフ

イーでは、よく刷られている版には原版保護のため鉄メッキが施されており、保存の際にはグラウンドをかけておく。調査時には、グラウンドがあらかじめ落され、観察に適するように準備されていた。また、メッキはごく薄いので、刻線の形状には影響がない。デジタル・マイクロスコープでの組織的な観察はこれまでに例がなく、最初の研究機関であるルーヴル美術館カルコグラフィイーでの調査は、試行的、予備的なものと位置付けた。ポドカン氏の全面的な協力のもとで、ボス晩年 1676 年の作である、ドダールの『植物誌』ための挿絵の一枚である《マンドラゴナ》を対象として検討を重ねた結果、刻線をより明確に観察するには斜光のライトが有効であることが明らかになった。デジタル・マイクロスコープには、レンズに直下ライトが付いているが、ライトを消して、別のライトで斜めから光を当てる方法を実験した。

ボスの原版は現存数が少なく、ルーヴル美術館カルコグラフィイー所蔵のこのシリーズ、およびナンシーのロレーヌ州博物館とトゥール美術館に所蔵されている各 1 点が知られているのみである。

ナンシーのロレーヌ州博物館は、豊かなカロの版画のコレクションで有名であるが、原版も 338 点所有している。ここでは、原版は原則として現状のままを維持するという方針をとっており、原版の状態は様々であった。つまり、インク詰めされているものもあれば、ないものもある。ボスの原版は、カロの 1632 年の《戦争の悲惨 (小)》のタイトルである。ボスはカロの作品に参加している例がいくつかあり、両者の接点を考える上でも興味深い時期の作例である。ルーヴル美術館カルコグラフィイーの原版の場合と同様に、ここでもボスはエシヨップを使ったと考えられるところにさらに太くするため、あるいはアクセントをつけるためにビュランを使用していることが認められた。カロの原版でも、ビュランを使用したと認められる箇所が随所にあり、カロの場合はより表現としての使用という傾向が強いことが理解された。さらに、ボスの『腐蝕銅版画技法』第 2 版で、第 2 の腐蝕法の実践者として新たに紹介されている版画家であり、当時のアカデミーの有力者であったセバスチャン・ル・クレールの原版もあわせて観察した。ここでもビュランがエッチングとともに用いられていた。カロの原版と異なり、セバスティアン・ル・クレールはロレーヌ州博物館でも未整理の状態であり、われわれの観測したデータ等を提供した。

国内では、ハウステンボス美術館・博物館にレンブラントの原版が 2 点所蔵されており、比較のために調査を行った。ここでは、すでに原版がプラスチックの板で封印されており、直に原版を見ることは不可能であ

った。原版はインク詰めされており、観察には適した状態ではなかったものの、原版保存の状況の一例として興味深かった。

第 2 回の調査では、第 1 回の調査の補足を行うと同時に、新たな機関でも調査を行った。とくに重要なのはトゥール美術館とブリュッセルの王立図書館カルコグラフィイーである。トゥール美術館では、1639 年のデマレの『アリアヌ』の連作の一枚である《トレバスの前のエピカリス》の原版を調査した。この原版は、1995 年に美術館所蔵となり、もっとも最近に発見されたことで話題になったもので、2004 年の展覧会でも展示された。収蔵時に、この原版はルーヴル美術館カルコグラフィイーで処置された。インク詰めされているものの、ポドカン氏の方針で、ニスではなく純粋な蠟がごく薄くかけられている。クロード・ヴィニョンの下絵によりボスが彫版したこの原版にも、やはり直彫りが使われていると考えられる箇所が認められた。一方、非常に機械的にひかれているように見える緻密な平行線は、明らかにエッチングであり、ボスの技量の高さが理解できた。

ブリュッセルの王立図書館カルコグラフィイーでは、カロの原版 3 点とともに、クロード・メラン (1598—1688) のよく知られた 1649 年の《聖顔》の原版を調査した。当時からエングレイヴィングの卓越した技で賞賛されていたメランについては、ルーヴル美術館カルコグラフィイーでも 1677 年の《アグリッピーヌあるいはムネモシユネ》を調査した時にすでに確認していたが、その巧みなエングレイヴィングの線は、何度も刻線を重ねるようにして作られている。《聖顔》はその作品に「けっして交わることのなき/ただ一条の線にて作れり」と記されているが、実際は異なっているばかりでなく、明らかに訂正している箇所や、あらかじめ当たりをつけてから彫っていた箇所が認められた。

(2) ルーヴル美術館カルコグラフィイーのポドカン氏とは常に緊密に連絡をとり、ディスカッションを重ねて研究を行った。時に、実演も交えて多くの専門的なアドバイスを受けた。とくに各調査機関で撮影したマイクロスコープの画像についての解析にも協力していただいた。また、ポドカン氏が 2010 年 1 月に来日し、金沢美術工芸大学で特別ゼミナールを開催した折にも、ディスカッションを行う機会を持つことができた。エングレイヴィングかエシヨップかという問題は、当時も様々な用具を用いていたと想像できるものの、判断が難しいという慎重な意見であった。

(3) ボスの原版を調査した結果、主にエッチングで制作されている版に、エングレイヴ

イングが随所に使用されていることが認められた。ボスは『腐蝕銅版画技法』においても第1章25節、26節においてエングレーヴィングの用具であるビュランの扱い方について触れている。また15節では、エシヨップの使用に関して、かつては自身もポイント（エッチング・ニードル）で先に彫った線をエシヨップでなぞっていたが、逆の方がよいと勧め、続いて「ビュランが使える人は、作品を酸で腐蝕させた後、ビュランでハッチングを太くすることができる。むしろこの方が今述べたやり方〔ポイントの使用〕よりも、線がずっときれいになる」と述べている。ここでは、線を太くするために、ビュランの使用をむしろ積極的に認めているのである。初期の《戦争の悲惨（小）》のタイトルでは、エシヨップを使用したと思われる、獣口を象った杵装束の下カルトゥーシュの一部に対照的な処理がみられる。すなわち原版左の部分では、ポイントの線をエシヨップでなぞったようなぎこちないエッチングによる肥瘦のある彫りがみられる一方で、同様の右の部分では、腐蝕後にビュランが加えられ、より滑らかな彫りになっている。両者が混在するのは、まだエシヨップに慣れていない実験的な試みであったためかもしれないが、ボスの記述との関連を示す興味深い例だといえるだろう。

(4) ボスの『腐蝕銅版画技法』では、硬軟の2種類の防蝕被膜の処方が記されている。防蝕被膜の再現実験については、すでに予備的な実験を行っている（神谷佳男「腐蝕銅版画の防蝕被膜について—アブラム・ボスの『腐蝕銅版画技法』を中心に」『金沢美術工芸大学紀要』第49号、2005年、91—104）。この実験ではボスの初版『腐蝕銅版画技法』（1645年刊）をもとに、ボスの硬軟のワニス（防蝕被膜）に焦点を当てたものになっていた。しかし、17世紀腐蝕銅版画技法の視点から見れば、1745年に刊行されたシャルル・ニコラ・コシャンによる増補改訂新版に、ボスに多大な影響を与えた彼の師であるジャック・カロやボスと同世代であるレンブラントの防蝕被膜（グランド）の処方が収録されている点は興味深い。ボス自身は、彼らの処方を具体的に記述しているわけではないため、ボスの初版100年後に出版された第3版コシャン版『腐蝕銅版画技法』に記されたれカロとレンブラントの防蝕被膜の処方に頼らざるを得ないが、この18世紀の著者コシャンの記述による17世紀のグランドの処方は、果たして信憑性のあるものかどうか、コシャンによるグランドの処方再現実験結果から、大いに疑問を抱かせるものだった。

ボスの時代にシロップ状のグランドが使用されていたといっても、100年後のコシャ

ンたちは実際その防蝕被膜を使用することもなく、ボスの『腐蝕銅版画技法』の中だけでしか存在しなかったのではないか。そのようなボスとコシャンとの隔たりが、カロやレンブラントの防蝕被膜の処方にも存在する。例えば「カロのある手記から引用した『軟ワニス』」または「レンブラントの白グランド」には、琥珀がアスファルトと共に原料として使用されていることになっているが、再現実験では、琥珀は溶けずに小さな粒子のまま残った。コシャンは、17世紀のグランドを再現することなく、1745年『腐蝕銅版画技法』を発売したのだろう。このコシャンの影響は極めて大きく、ボスの初版のグランドの処方を除けば、シャルル・ニコラ・コシャンの『腐蝕銅版画技法』により、17世紀腐蝕銅版画の防蝕被膜の処方は検証されることなく確立されてしまった。コシャンという偉大な著者ゆえ、カロやレンブラントの防蝕被膜は、現在まで誰からも疑われることなく神話化されてしまったと言えるだろう。

(5) 今回2か所のカルコグラフィーで調査を行ったが、同じくオリジナルの原版を所蔵保管しつつ、原版から刷って販売するという機能を持ちながら、その方針は大きく異なっていた。たとえば、ブリュッセルの王立図書館カルコグラフィーでは、すべて大きさによって分類され、価格もまた大きさで定められているが、ルーヴル美術館カルコグラフィーではそのようになっていない。共通するのは、現代の作家の原版も所蔵していることであり、部数を限定するかどうかという違いこそあれ、このことはカルコグラフィーという機関が過去の遺産とともにあるのではなく、まさに現代に活動していることを示しているといえるだろう。しかしすでに述べたように、カルコグラフィーという機関そのものの重要性は次第に薄れているのが現状である。ローマやスペインのカルコグラフィーも視野に入れて、その実態を調査することはこれからの課題となるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 保井亜弓、ヴェラル版『変身物語』*La Bible des Poètes* 研究、『金沢美術工芸大学紀要』、第54号、2010、33-46、査読無
- ② 神谷佳男、ルーヴル美術館のカルコグラフィー、『金沢美術工芸大学紀要』、第54号、2010、59-72、査読無
- ③ YASUI, Ayumi, ‘Belgica, Personification of the Low Countries in Prints during the Eighty Years’ War’, The Bulletin of Kanazawa College of Art, no. 53, 2009, 11-23、査読無
- ④ 神谷佳男、ヨーロッパに現存する木製銅版画プレス、『金沢美術工芸大学紀要』、第53号、2009、49-57、査読無

[学会発表] (計2件)

- ① 保井亜弓、デジタル・マイクロスコープによる凹版画原版調査、金沢芸術学研究会、2009年8月4日
- ② 神谷佳男、ルーヴル美術館カルコグラフィーとその活動、金沢芸術学研究会、2009年8月4日

[図書] (計2件)

- ① 保井亜弓、Bunkamura/読売新聞、「ネーデルラント版画事情」、『ベルギー王立図書館所蔵 ブリュージュ版の世界』、2010、252-253
- ② 保井亜弓、中央公論美術出版、「初期版画における多色化の問題—制作と受容の側面から—」、『ルクス・アルティウム 越宏一先生退官記念論文集』、2010、210-221

6. 研究組織

(1) 研究代表者

保井亜弓 (YASUI AYUMI)
金沢美術工芸大学美術工芸学部教授
研究者番号：30275086

(2) 研究分担者

神谷佳男 (KAMITANI YOSHIO)
金沢美術工芸大学美術工芸学部教授
研究者番号：10264681